

## 社会への啓発活動と社会への教育のあり方に関する研究

研究分担者 朝居 朋子 藤田医科大学保健衛生学部看護学科 准教授  
佐藤 毅 東京学芸大学附属国際中等教育学校 教諭

### 研究要旨:

生徒の思考を重視する授業実践として、今回は臓器移植の中でも倫理的ジレンマの1つである「匿名の原則」を題材にした。生徒の97%以上が関心度5(とても関心をもてた)または4を示した。生徒は過去の学習内容と合わせて考え、自分の意見をまとめ、他者の意見を聞くことで当事者の立場になり、思考をより深めることができた。臓器移植に関する知識伝達の授業だけでなく、倫理的ジレンマを考える授業を実践することの有用性が示唆された。今後もこのような授業を通じ、いのちの大切さについて考え、課題解決能力をつけた生徒が一人でも多く育つことで、社会への啓発活動につながれると考える。また、臓器移植を軸に教科を融合し、各校種の発達段階に合わせ、その融合が一目でわかり、教員が効果的に授業を行える視点でマップを作成した。このマップにより、教員が教科横断的な意識を持ち、教科間のつながりを意識したうえで、授業実践をすることができる。

### A. 研究目的

2018年度から小学校で、2019年度から中学校で道徳が教科化され、いのちの尊さについて学校教育で取り上げられる機会が増えてきた。また、Covid-19パンデミックの影響から、いのちの教育が重要視されている。

臓器移植を題材した授業は、いのちの尊さについてだけでなく、死生観、終末期における自己決定や家族の意思決定など社会的な課題を考えるうえでも注目されている。2021年度大学入学共通テスト公民の現代社会で臓器移植が出題されたことから、基礎知識として修得すべきことになったと言える。

臓器移植が生徒に周知され基礎知識として修得された後は、臓器移植の授業は思考を深める段階に移行する。即ち、社会人として生きていく上で必要な主体的に考え課題解決できる力を養う題材となりえる。臓器移植を題材にした授業は、これからも保健体育をはじめ道徳や社会科、理科、家庭科、総合的な学習の時間(2022年度より高等学校は総合的な探究の時間)などで充実した実践がより一層期待される。

思考を重視する授業実践として、今回は臓器移植の中でも倫理的ジレンマの1つである「匿名の原則」を題材にすることにした。この授業の目的は、前年度の臓器移植の授業(4時間)を土台にして、

今回の学びを通し、死生観の醸成を目指し、生徒たちが主体的にいのちについて考えて人生を送ることができることを期待するところにある。具体的な目標として3つ挙げられる。

1) 正しい知識を理解したうえで思考を進めることである。日本の臓器移植の中で、「匿名の原則」が大きく取り上げられることはない。これは、死後の臓器提供・移植において、種々のリスク回避のためドナー家族とレシピエントの匿名性を担保するというもので、臓器移植法ガイドライン第12の3 個人情報保護「(略)移植医療の性格にかんがみ、臓器提供者に関する情報と移植患者に関する情報が相互に伝わることのないよう、細心の注意を払うこと」と規定されている。しかし、ドナー家族への配慮から、レシピエントの面談が行われる国もあり、それがドナー家族の癒しにつながることもある。「匿名の原則」という簡単には是非の判断ができない題材を用い、過去の出来事やこれまでの歴史、現状等の正しい知識をインプットしたうえで物事を捉える習慣を身に付けることである。

2) 自らの考えや他者の意見、考えられるリスク等の情報を整理し、課題を発見したり判断したりする能力を身に付けることである。

3) 社会の一員として、自分ごととして考え、社会との関わりを意識させることである。

この3つが相互に交わりながら、生徒が「匿名の

原則」について考えを深めながら、なぜそのような原則があるかの背景を理解し、主体的に考えられることを期待した。

過去の日本の教育課程を振り返ってみると、各教科の内容の教授、知識や技能を伝達が中心であった。しかし、近年は新学習指導要領の目指すものや新しい教育観がある中で、教科等横断的な視点で教育実践を進めていくことも重視されている。本研究協力者である佐藤は、2000年度に高等学校保健において臓器移植を題材にした授業を創り上げ、総合的な学習の時間や2013年度からは道徳でその内容を精選し続けてきた。特に近年は、理科、社会、家庭科等の複数の教科で臓器移植に関連する内容が題材として取り上げられており、各教科との連携を図り、学習活動を充実させる視点を持ちながら、臓器移植の授業を編成している。学校教育において、臓器移植を考えることでのちの大切さについて深める各授業の関連性が一目でわかり、イメージしやすいように、教科横断的な観点でマップにまとめることにした。

## B. 研究方法

1. 中高一貫校の保健体育の時間を使い、3年生の117名の生徒に「匿名の原則」を題材にした授業を行った。その後、66名の生徒からフィードバックを得た(内容:授業への関心度、印象に残ったこと、学んだことが今後の自分にどう生きると思うか、匿名の原則を崩すべきかどうかとその理由、自分ごととして考えることができたか)。

2. 臓器移植に関する教科等横断マップを作成した。

(倫理面への配慮)

授業の実施及び生徒からフィードバックを集めることについて当該校の校長の了承を得た。フィードバック内容は匿名性を担保し、分析利用に関しては個々の生徒の了承を得た。

## C. 研究結果

1. 「匿名の原則」を題材にした授業の実践

(1) 導入

まず、前回授業の復習や「4つの権利+1」<sup>注1</sup>、過去に学んだ教科に関連したもの、今後学ぶことが

予想される内容の確認を行った。また、決まった解答がないことや、他者の意見に耳を傾けたうえで、自分なら・自分だったらと自らの意思をもつように促した。それから、道徳の22つの内容項目に関してはD-19(生命の尊さ)を中心に、自由に感じた内容項目を選ぶことも提示した。

<sup>注1</sup> 一般的には、公益社団法人日本臓器移植ネットワーク(以下、JOT)が臓器移植の「4つの権利」を示されるが、過去の経験から、「よく考えたがまだ決まらない」という生徒が多かった。そこで、「よく考えたがまだ決まらない」というものを加えて「4つの権利+1」としている。

(2) 展開

展開は、5つの内容から構成された。

まず、今回の内容の登場人物の確認と「匿名の原則」を説明した。ドナーとレシピエントだけでなく、周囲の家族についての意識を持たせながら、移植医療における「匿名の原則」とは何かを解説した。

次に①ドナーの気持ち、②ドナー家族の気持ち、③レシピエントの気持ち、④レシピエント家族の気持ちをそれぞれ考え、そして他者の考えを共有する時間を設けた。①～④に対して、自分の考え、他者の考えをそれぞれ1分ずつ設定した。それをワークシートに自らの考えと他者の意見を聴いたうえで気づきを記入しながら進めていった。

そして、「生命倫理」、「滑りやすい坂論」、「インフォームド・コンセント」(図1)を説明した。ただ闇雲に考えさせるのではなく、医療・科学が発展していく中で、基本的なことや前提となることを伝えたいと考えさせることは、特にこの分野において必要不可欠である。



図1 滑りやすい坂論、インフォームド・コンセント

それから、リスクを3つ紹介した。1つ目は、ドナ

ーが見つかり、移植も無事に終わったがしばらくして具合が悪くなってしまった場合、双方が知り合うことで、ドナーやドナー家族を逆恨みしてしまう危険性がある「逆恨みのリスク」(図2)について。2つ目は、移植が無事に終わり、ドナー家族の想いが強すぎてしまう場合、双方が知り合うことで、ストーカーのようにレシピエントを追いかけまわしてしまう危険性がある「ストーカーのリスク」(図3)について。3つ目は、移植が無事に終わり、双方が知り合うことで、ドナー家族がレシピエントやレシピエント家族に対して金銭を要求してしまう危険性がある「金銭を要求してしまうリスク」(図4)である。

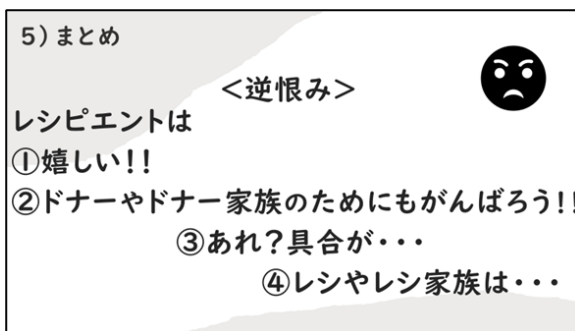


図2 逆恨みのリスク

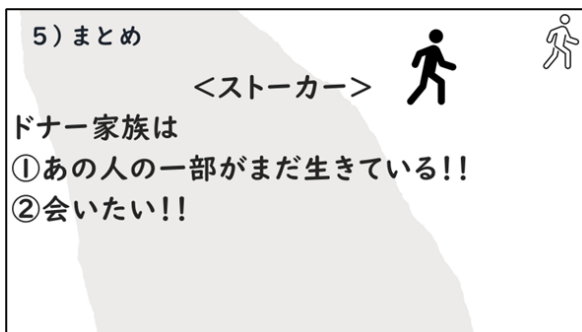


図3 ストーカーのリスク

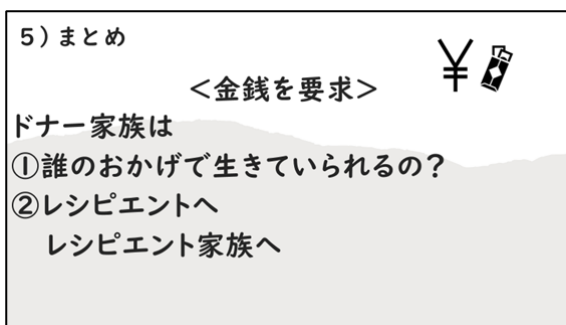


図4 金銭を要求してしまうリスク

展開の最後として、昨年度、今年度の授業を通し、この「匿名の原則」はそのままがいいのか、それとも崩すべきなのかを考えさせる(図5)時間を設けた。自らの考えに加え、対策についても言及した。

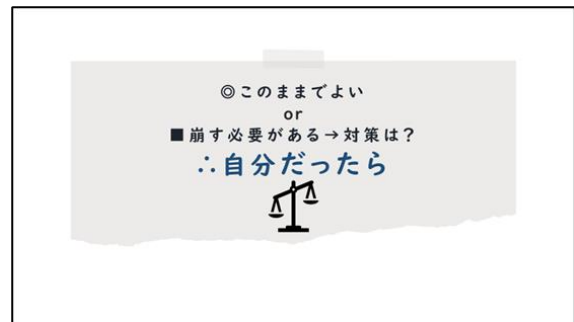


図5 匿名の原則に対する私見

匿名の原則を保持しながら、レシピエントがドナー家族に気持ちを直接伝える方法として、サンクスレターがあることを紹介し、JOT広報担当者が朗読した。その後、元JOT臓器移植コーディネーターと生徒の質疑応答を行った。

### (3) 生徒のフィードバック

フィードバックをした66名中、64名から分析の了承を得た。

授業に対する関心度を5段階(1 まったく関心をもてなかった～5 とても関心をもてた)で聞いたところ、5 46.9%、4 50.2%、2 1.6%、1 1.6%であった(小数点2位以下を四捨五入しているため100%にならない)。

5, 4と答えた理由としては、「匿名の原則という知らないテーマだった」、「生徒間で意見交換した」、「当事者の立場になって深く考えた」等が挙げられた。逆に、2, 1と答えた理由は「既に調べたことがある」であった。

授業で印象に残ったことについては、「匿名の原則があること」「本当は人の優しさで行われるべき臓器移植にも負の面があること」「臓器移植にストーカーなど社会的な問題、リスクもあり得ること」「サンクスレターが感動的だった」「それぞれの立場に立って考えること」等が挙げられた。

学んだことが今後の自分にどう生きると思うかについては、「提供、移植の立場になった時に考えることができる」「身近に臓器移植関連のことが起きたとき慌てないで済む」「正しい知識を持っておくことは大切」「家族と話そうと思う」「意思決定をするきっかけになる」「違う意見を持つ人に対して、『違う意見を持っている』で終わりではなく、なぜそう考えてい

るのか理由まで知る」「生きるということに感謝をし、毎日を充実させて過ごす」等であった。

匿名の原則に対する意見をまとめてみると、「崩さずにいくべき」67.2%。「崩すべき」6.3%。「どちらともいえない」26.6%であった(小数点2位以下を四捨五入しているため100%にならない)。

「崩さずにいくべき」と考える理由は、「直接会うことのリスクが大きい」と考えている者が多かった。また、レシピエントから感謝の気持ちを伝えるサンクスメーターの制度があることを挙げていた。

「崩すべき」の理由は、「リスクはあるが第三者を挟むなど問題を減らす工夫をする」「双方の安全が守れるようルールを作ればいい」「ドナー家族の知る権利がある」等が挙げられた

「どちらともいえない」の理由は、「SNS等時代に合わせて変化していくべき」「原則を守りつつ、手紙のやり取りを続けて双方の同意があれば対面したりお互いの情報を教え合ってもいいと思う」「どちらにもメリットデメリットがあり、崩さないことによって引き続き発生する問題もあると思う」「難しくわからない」が挙げられた。

## 2. 教科等横断マップの作成

小学校・中学校・高等学校の新学習指導要領解説(理科・社会・保健・道徳・総合的学習(探究)の時間)を読み込み、臓器移植を考えるうえで教科の枠を超えて共通している事柄がないかを確認した。その結果、「臓器の仕組み」(理科)、「人権」(社会)、「家族」(家庭科)、「医療制度」(保健)、「生命の尊さ」(道徳)、「課題の解決」(総合的な学習(探究)の時間)といった言葉が記載されていた。臓器移植を軸に教科を融合し、各校種の発達段階に合わせ、その融合が一目でわかり、教員が効果的に授業を行える視点でのマップとなった(図6)。

## D. 考察

### 1. 「匿名の原則」を題材にした授業の実践

授業実践を通し、普段触れる機会が少ない倫理的ジレンマの話題について考え、自らの考えと他者の考えを共有する時間を持ち、活発な意見交換が行えた。意見共有は、生徒にとっては有意義であったことはフィードバックからも明らかである。臓

器移植は、意見が分かれる題材であるため、正しい知識の修得の上に自分の意見の形成をし、他者と意見共有をすることでさらなる私見の醸成につながるといえる。

また、導入段階で、復習、過去に学んだ教科で関連した内容、今後学ぶことが予想される内容の確認をしたことで、基礎知識に基づいた多角的な思考ができたと考える。特に「匿名の原則」は、これまで学修していない新たな内容であり、若年の生徒は教員の発言に影響を受けることが多いと考えられる。特に、今回の「匿名の原則」のような倫理的ジレンマについては、取り上げ方次第では生徒の意見が誘導される可能性がある。いかに当事者の立場で考えさせるかがキーである。生徒のフィードバックにも示されたように、生徒にとっては、臓器移植に対する考えを深める機会になったことや、学びの資質・能力が形成される学習活動であったことが示される。

フィードバックにも書かれていたように、家族と話す生徒もあり、臓器移植を授業で取り上げることで、学校から家庭に、ひいては社会につながり社会啓発の一助となる。

このような授業の成果は、一般的な学力(偏差値)と違い、すぐに形に見えるものではない。しかし、生徒の思考の深さ、他者の意見に耳を傾けること、しっかりと心の変容はフィードバックからも見てとれる。今後も、回数を重ねながら考えを深めていく機会があれば、少しずつ死生観が積み重なり、豊かになり、将来的に臓器移植に対する社会の変容の礎になると確信している。今後の教育のあり方として、生徒を通し、家族で話し合う機会を増やすことが望ましい。一般市民の死生観の醸成につながり、数年後の社会が変わっていくことが推測される。いのちの授業を行う教員サイドの理由として、「生きるとは、生かされているということ」に気づいて欲しいという思いがある。生徒たちが、様々な課題を発見し、そして解決に向けて自らの考えを持つことや、自己の生き方を考えることは非常に重要で、今回の報告からもいのちの授業を発展させていく必要がある。今後もこのような授業を通じ、いのちの大切さについて考え、課題解決能力をつけた生徒が一人でも多く育つことで、社会への啓発活

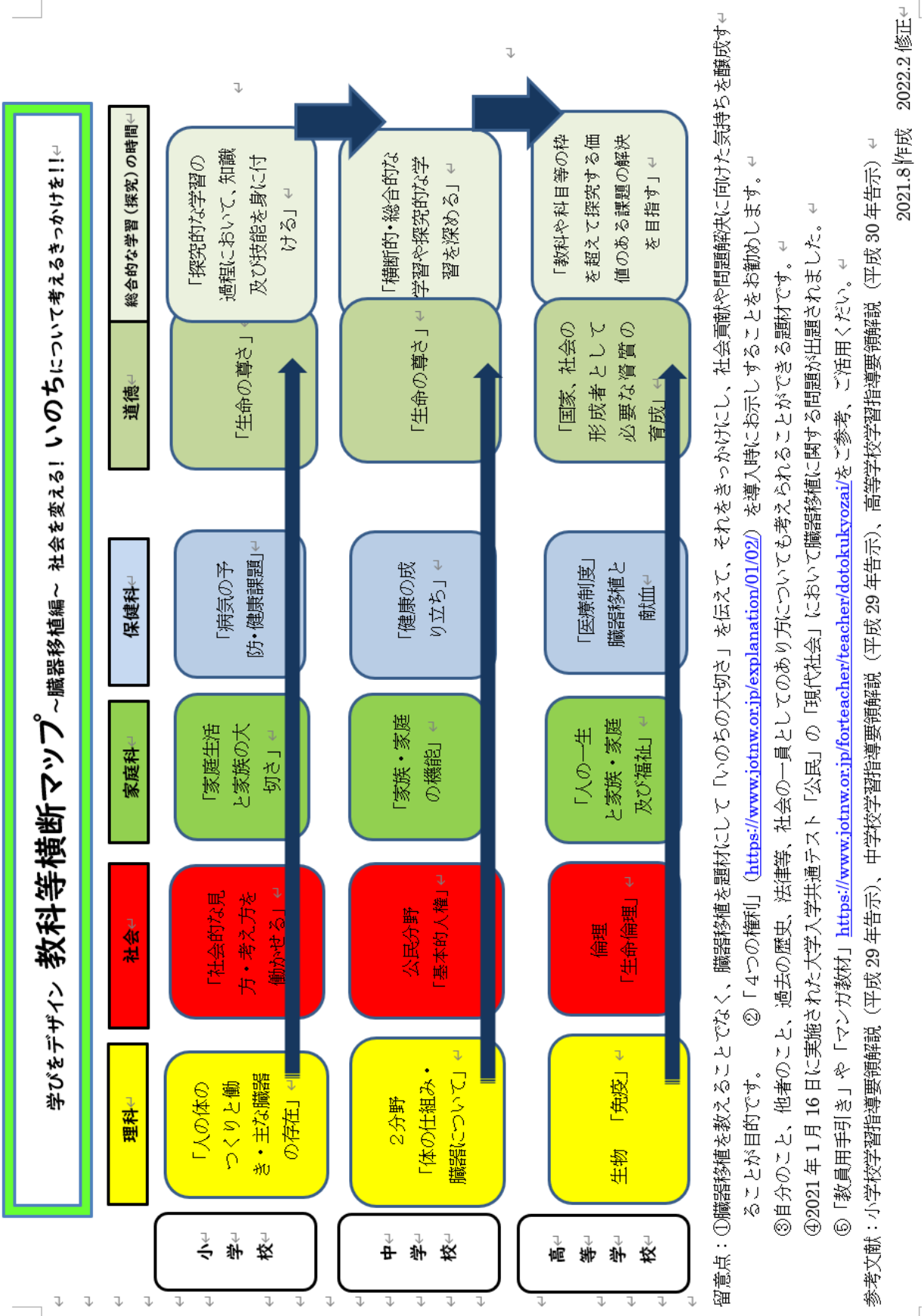


図6 教科等横断マップ

動につなげられると考える。

## 2. 教科等横断マップの作成

臓器移植について考えるには、基礎知識として生命や身体に関すること、家族、基本的人権、生命倫理等、様々な内容が必要となる。臓器移植を教えることが目的ではなく、臓器移植を題材にして「いのちの大切さ」を伝え、それをきっかけにし、生徒が社会貢献や問題解決に向けた気持ちを醸成することが目的である。

学校教育に関わる多くの教員が、教科横断的な意識を持ち、教科間のつながりを意識する必要がある。このマップを有効なツールとし、教科同士を関連付け、授業内容を相互補完することで、生徒の学びがより深くなる。教員の授業実践が単発的ではなく、横のつながりを意識しやすくすることで、児童・生徒の学びが深いものになっていくことを期待する。

## E. 結論

生徒の思考を重視する授業実践として、今回は臓器移植の中でも倫理的ジレンマの1つである「匿名の原則」を題材にした。生徒は過去の学習内容と合わせて考え、自分の意見をまとめ、他者の意見を聞くことで当事者の立場になり、思考をより深めることができた。臓器移植に関する知識伝達の授業だけでなく、倫理的ジレンマを考える授業を実践することの有用性が示唆された。

臓器移植を軸に教科を融合し、各校種の発達段階に合わせ、その融合が一目でわかり、教員が効果的に授業を行える視点でマップを作成した。このマップにより、教員が教科横断的な意識を持ち、教科間のつながりを意識したうえで、授業実践をすることができる。

## F. 健康危険情報

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

- ・佐藤毅:高等学校の保健体育科における授業.小児版臓器移植ハンドブック.94-96.
- ・Tomoko Asai ,Yasuhiro Taniguchi,Yukiyoshi Tsukata: Individual readiness for transplantation

medicine of laypersons and the number of deceased organ donors: a cross sectional online survey in Japan, South Korea and Taiwan.BM J Open 12:e048735. doi:10.1136/bmjopen-2021-048735.

- ・石橋ひろ子,朝居朋子,久納智子:患者の同性パートナーと患者と疎遠な家族等の脳死下臓器提供の意思決定における院内移植コーディネーターによる総意形成支援.家族看護学研究.27(2).1-12.
- ・朝居朋子:臓器提供に係るスタッフの動きと役割-A Day in the Life.救急医学.45(10).1255-1262.
- ・加藤櫻子,朝居朋子,剣持敬,瀬瀬一枝,宮島由佳,吉川充史,明石優美: 大学病院の国際化に伴う外国人を対象とした臓器・組織提供体制の検討.日本臨床腎移植学会雑誌.9(1).134-136.

## 2. 学会発表

- ・佐藤毅:「包括的ないのちの授業の必要性」～生老病死から考える～.第124回日本小児科学会学術集会.2021.4.17.日本小児科学会雑誌.125(2).143.
- ・朝居朋子,横田裕行:新型コロナウイルス感染拡大の中での院内コーディネーター研修の実施状況等に関する調査.第57回日本移植学会総会.2021.9.19.日本移植学会総会プログラム抄録集.56(online).

## H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
- 3.その他  
なし